

日本記者クラブ会報

第454号
2007年
(平成19年)
12月10日発行

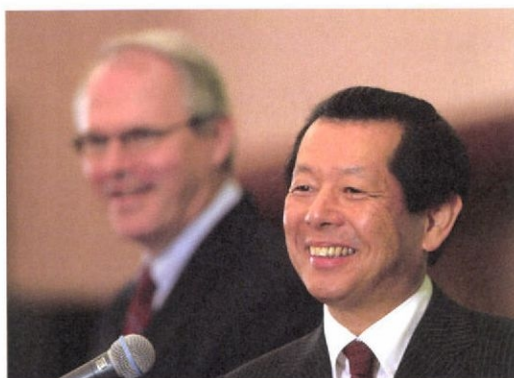
〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
http://www.jpnc.or.jp

総選挙、自民総裁選、インド洋、北朝鮮

企画委員長 船橋 洋一

2007年も半ばからの企画委員長で、まだ駆け出しのよちよち歩きだが、企画委員の方々と事務局の皆さんのおかげで、何とかこなしている。活動のいくつかのハイライトを日記風に記すと――。

7月11日の7党党首討論会。始まる前、滝鼻卓雄理事長以下、委員会側と各党党首が「アラスカ」で打ち合わせをしたが、小沢一郎氏（民主党）が精彩がないというか精気がない。各氏に色紙をお願いしたが、安倍さんは「不動心」。小沢さんは「誠」。まともに筆を使えるのは安倍さんくらい。安倍さんのお祖父さんの岸信介が書がうまかったと、筆達者で辛口の宮沢喜一さんも岸さんの書は褒めていたが…。



見会補官次務米ルヒつたに立問に質11人
社新聞朝 = (11.3) 長委員船橋をした司会

で押し通す。小沢民主党の年金改革案の財務的裏付けが乏しいことを衝こうというわけだが、これに対して他の党首の反応が鈍い。「年金は数字ではありません。年金は心なので」とか、あるいは「安倍さんは年

金は数字と言っている。たしかに、自民党の数字は、5000万の消えた年金にほかなりません」とか、切り返せばいいものを。歯がゆい。

9月21日。自民党総裁選公開討論。福田康夫氏対麻生太郎氏の一騎打ち。色紙は、麻生氏が「誇れる国」、福田氏が「信」。

橋本五郎（読売）、山田孝男（毎日）、宮田謙一（朝日）、長谷部剛（日経）の企画委員会が誇る硬軟、4人組が質問をたたみかけ、争点を鮮やかにめぐり出した。プロ中のプロの新聞記者ならではの緩急自在の「質問力」を目の当たりにして、私は心底、誇らしくなった。

この種の公開討論は、一対一の方が争点と表情がくつきりと際立つ。それもこの討論会の成功の秘密かもしれない。

10月24日。トマス・シーファー米大使を招いての昼食会と記者会見。記憶に残った大使の言葉がある。「テキサスにはことわざがある。

「Never trade an old friend for a new friend or you will wind up no friend.」古い友人を新しい友人に取り換えるな。そんなことをすれば、誰も友達がいなくなってしまう」。

シーファー大使のメッセージは明確である。日本国内にある、米朝急接近、さらには将来に起こりうる米中猛接近への懸念を念頭に、そうしたことは決して起こりません、ご心配なく、ということだ。シーファー大使がブッシュ大統領に北朝鮮核問題交渉の過程で「日本を売り渡すな」と「直電」を打ったと報道されたのはこの直後である。

11月3日。クリストファー・ヒル米國務次官補の記者会見。ヒルの日中韓訪問にワシントンから同行した日本人記者の一人が質問の手を挙げたら、ヒルが「彼らも質問していいのか」と私に小声で聞いた。「もちろん」と答えると、実に嬉しそうな顔をした。サービス精神のまことに旺盛な人なのである。

今後の課題？
選挙は面白い。それを争点と指導者像を含めて、わかりやすく、面白く、オマツリにすること。選挙は、企画委員会にお任せください。
(朝日新聞社主筆)

2007

私のお薦め本

3冊

年末恒例の「推薦書」企画。ことしは書評担当11人に今年1年で印象に残った3冊を選んでいただきました。年末年始の読書の参考にいかがでしょうか。

①江戸時代、広島藩を脱藩し、謹厳な頼一族の鼻つまみだった「自己チユウ男」山陽。「日本外史」に生涯をかけたこの男を支えたのは誰か。今日の家族の問題も透けて見える。②J・ジョイスの奇書「フイネガンズ・ウエイク」の翻訳者による「世界の奇語・日本語」礼賛。ああ、日本語は良きかな。③城山さんの3月の死後刊行された対談集。その重い「遺言」を30歳余も年若い高山が聞いた。

未完となった大佛次郎『天皇の世紀』を読み終えて、どうしても続きが読みたいと探し続けて出会ったのが①。この国の成り立ちがまざまざと立ち上がっていると同時に、時代と正面から向き合った人々の精神をたどることで、自分自身の精神も鍛えられた。05年の刊行だがお薦めしたい。②は昭和20年夏（特に8月14日）の緊迫感が伝わる貴重な証言録。③は「恋」（96年直木賞）と合わせて読みたい。

千龍 正夫

(北海道新聞東京社会部編集委員)

① 頼山陽 (上・下)

見延典子著 (徳間書店)

② 日本語は天才である

柳瀬尚紀著 (新潮社)

③ 日本人への遺言

城山三郎・高山文彦著 (講談社)

都築 和人

(朝日新聞読書編集長)

① 天皇と東大

大日本帝国の生と死(上・下) 立花隆著 (文芸春秋)

② 日本のいちばん長い夏

半藤一利編 (文春新書)

③ 望みは何と訊かれたら

小池真理子著 (新潮社)

大井 浩一

(毎日新聞学芸部)

① メディアと政治

蒲島郁夫ほか著 (有斐閣)

② 滝山コミュニケーション一九七四

原武史著 (講談社)

③ 色と空のあわいで——往復書簡集

古井由吉、松浦寿輝著 (講談社)

鵜飼 哲夫

(読売新聞文化部次長)

① 狐になった奥様

ガーネット著 (岩波文庫)

② 髑髏銭

角田喜久雄著 (春陽文庫)

③ 私の男

桜庭一樹著 (文芸春秋)

上原 克也

(日本経済新聞文化部)

① クリエイティブ・クラスの世紀

リチャード・フロリダ著 (ダイヤモンド社)

② 戦場に舞ったビラ

一ノ瀬俊也著 (講談社選書メチエ)

③ アリスの服が着たい

坂井妙子著 (勁草書房)

①は小泉劇場やアスベスト問題など、最近のニュース報道の現場報告を含む。乖離しがちなメディア研究とジャーナリズムの現実を結び努力が貴重だ。②は政治思想史学者による「私ノンフィクション」の試み。歴史の対象になるかどうかギリギリの距離に位置する70年代の時代相をうまくとらえた。③は「9・11」テロ事件直後に始まった新聞連載の往復書簡を軸に、現代文学の先端を走る二人が重ねた対話。6年前のものとは思えない鋭敏な思考が光る。

いい小説は題もいい。①は1922年出版の英国文学だが、匂いたつような文章は新鮮そのもの。これぞ小説中の小説、不条理愛の名作だ。②は昭和前期の大衆文学。荒唐無稽さもここまで極まると圧巻。波瀾万丈の展開で、ジェットコースターに乗っているように楽しめる。③は、「私の男」||「おとうさん」と娘の禁忌を超えた孤独と孤独の魂の触れ合い、もつれあいを鮮烈に描く気鋭の新作。

あらゆる人が創造的な才能を発揮してこそ本場の繁栄があり、標準から外れたアイデアに寛容な都市ほど経済的に成長する、というのが①の主張。日本の企業や組織にとっても示唆に富む。②は著者が私費で集めた百枚を超える宣伝ビラを通して太平洋戦争の情報戦の実態を伝える。「不思議の国のアリス」と子供服誕生の関係を明らかにする③とともに、資料を丹念に検証する著者の姿勢に好感が持てる。

①の著者はユング心理学の泰斗。現代にはびこる神話、平等神話やマルクス主義進歩信仰などの一面性をユーモアある文章で告発する。現実世界は矛盾だらけだから。
 ②は平等神話、共同体幻想に覆われた1970年代、政治学者の著者が通った東京都下の小学校時代を綴る。
 ③は新発田藩の無名の家臣たちの生き様を現在の記録を元に描いた小説。たまには「江戸」神話に心を遊ばせるのも心地よい。

①「森シリーズ」完結編。北の大地で繰り広げられる戦乱の情景はとにかくダイナミック。
 ②哀欲秘めた老武士の生き様を丹念に描いた。しかも剣豪小説の要素も忘れていないところが巧みだ。占領期の怪事件に材をとった小説③。占領下の特異な状況下で「ふた」をされた人間の狂気を、暴力ではなく幻想的に物語化した。理性と非理性の二面性という心理の深層をえぐって、現代的だ。

沖繩戦の「集団自決」をめぐる教科書検定問題は、沖繩の奥底に深く刻まれた戦争の傷に、日本がいかに無頓着であるかを見せつけた。
 ①はその日本に対する沖繩の深層意識へ迫る力作評論。
 ②は7月に死去した作家が、他者への想像力を失って内閉する現代日本へ警鐘を鳴らす。遺言。背景にあるのは流動化する戦後社会への危機感だ。
 ③は「自己責任」のモラルが強調され人間同士のつながりが寸断された現代を、フリーターなど不安定雇用層（プレカリアート）の立場から告発する。

江原 和雄

(産経新聞文化部次長)

①老愚者考

A・グッゲンビュール・クレイグ著 (新曜社)

②滝山コミュニケーション一九七四

原武史著 (講談社)

③露の玉垣

乙川優三郎著 (新潮社)

栗原 淳

(東京新聞文化部)

①氷結の森

熊谷達也著 (集英社)

②銀漢の賦

葉室麟著 (文芸春秋)

③TOKYO YEAR Z

ERO
デイヴィッド・ピース著 (文芸春秋)

金子 直史

(共同通信文化部次長)

①オキナワ、イメージの縁

(エッジ)

仲里効著 (未来社)

②中流の復興

小田実著 (日本放送出版協会)

③生きさせろ!

雨宮処凛著 (太田出版)

三澤 克彦

(時事通信社文化部次長)

①人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか

水野和夫著 (日本経済新聞出版社)

②生物と無生物のあいだ

福岡伸一著 (講談社現代新書)

③国のない男

カイト・ヴォネガット著 (日本放送出版協会)

岡野 正次

(NHK BS2「週刊ブックレビュー」プロデューサー)

①道元禅師(上・下)

立松和平著 (東京書籍)

②生物と無生物のあいだ

福岡伸一著 (講談社現代新書)

③サイン会はいかが?

(成風堂書店事件メモ)
大崎梢著 (東京創元社)
ミステリ・フロンティア

松尾 孝司

(西日本新聞文化部・マイスター)

①神聖喜劇①②③④⑤⑥

大西巨人・原作
のぞみのぶひさ漫画 (幻冬舎)

②山口長男―終わりのないかたち

池島充著 (清流出版)

③至宝の大自然 屋久島写真文集

太田五雄著・写真 (南方新社)

①は1995年以降の世界経済の変貌を、米国の帝国化、金融の優位性、格差拡大などの観点から詳述し、部分でなく全体をとらえる必要性を痛感させる。
 ②は生物一個体が日々取り込む物質で組織を再生していくダイナミックな動きという視点が興味深い。
 ③は今年没した作家の最後のエッセー集。善が悪に勝つには天使がマフィアなみに組織化される必要がある。など味わい深い言葉が並ぶ。

①不明な点の多い僧・道元の生涯を作家の想像力で見事に描き出す。私たちが今、忘れてしまっている日本人の「真の心」を思い出させてくれた。
 ②「生命とは何か?」という根源的な問いに、最先端の科学で答えてくれる。著者の真摯な態度から「科学・科学者」の在り方についても考えさせられた。
 ③謎解きの間に二人の主人公、杏子・多絵のコンビに惚れ、笑い、泣かされる。書店員の仕事のディテールも楽しく、シリーズ3作ともはずれなし。

九州を拠点とする新聞であり、九州に光を当てたり、九州を記録する、あるいは発掘するといった仕事捨てがたい。
 ①は知る人も少なくなった大西巨人の膨大な原稿を、若い世代にもわかりやすく「活写」し蘇らせた。
 ②は山口長男という人気抽象画家の知られざる世界をフランス取材などを通し発掘した。
 ③は、人を寄せ付けない屋久島の奥の奥を記録し照らし出した。ほかには、吉田修一の「悪人」が印象に残る。

官邸クラブ

号外は舞ったが高揚感なし

▼高木 桂一
(産経新聞社)

2000年の扉が開かれようとしていた8年前の大晦日の午後の出来事がだぶった。当時、モスクワ特派員だった筆者は、テレビで流れるロシアのエリツィン大統領の電撃的な辞任表明演説に呆然と立ちつくした。その体験が「どんな大事件が起きようとも動じない」という記者生活への免疫になっていたのだが…。

「最近の政界にはちよっと『まさか』が多すぎる」。小泉純一郎元首相は夏から秋にかけ踵を接して起き

た永田町の現象をそう評してみせたが、筆者を含め政権の中核である首相官邸に詰める記者の大半が、その「まさか」の幕開けたる9月12日の安倍晋三前首相の唐突な辞意表明に度肝を抜かしたのは事実だ。

騒動はその日の昼過ぎのTBSの「安倍首相が辞意」の大スクープのテロップから始まった。首相番の各社記者が待機している官邸の3階エントランスには応援の記者も加わり、ごった返した。多くは「首相の辞意」を半信半疑に受け止めていた

だろうが、記者ク

見を行ったが、記者からの怒涛のような質問攻めをかわすためか、内閣報道室長が「予定が入っているの」と会見を途中で打ち切ってしまった。興奮状態にあった記者たちが「総理が辞めるんだ。なぜ、あなたに仕切る権利があるんだ」と報道室長に詰め寄る一幕もあった。

7月の参院選での自民党惨敗もよそに続投し、周囲を仲良しで固めた「チーム安倍」が機能不全のままであるうえ、健康問題も抱えていた満身創痍の宰相の政権運営は早晩行き詰ると永田町ではささやかれていた。しかし国会での所信表明演説を前々日に終え、午後には国会での各党の代表質問に立つはずだった首相がいきなり「辞める」と無責任に政権を放り出した姿は、つとに尋常でない例えに用いられている「永田町の常識」をはるかに超越していた。

◇

記者の(官邸) 田首相は「14時から総理が見える」と告知したことで、ようやく確信となった。安倍氏の記者会見後、当時の女房役である与謝野馨官房長官も記者会

いつも駆け足の田首相(官邸) 記者の(官邸) 田首相は「14時から総理が見える」と告知したことで、ようやく確信となった。安倍氏の記者会見後、当時の女房役である与謝野馨官房長官も記者会

記者たちには、もはや「政治的死者」となった前首相の辞任ショックの余韻に浸っている暇はない。官邸担当記者は与党担当記者とともに、取材の軸足を自民党の後継者選出という大政局に移した。9月23日に福田康夫首相が自民党新総裁に選出され、26日の新内閣発足に至る2週間は記者たちもゆっくり休む日はな

ったのは言うまでもない。「まさか」は続く。野党に参院の主導権を握られた「ねじれ国会」の中、安全運転に徹してきた福田首相が10月30日と11月2日に小沢一郎民主党代表との電撃的な党首会談を行い、「大連立」構想などをめぐって協議した。一時は小沢氏の辞任騒動に発展し、民主党サイドの情報と官邸・与党からもたらされた情報との矛盾に、記者たちは「何が真実なんだ？」と右往左往させられた。

5月には松岡利勝農水相が議員宿舎で自殺を遂げた。これほど短期間に新聞の「号外」が飛び交った年はない。一連の突発的な出来事は、政治取材の登竜門たる官邸詰めめ若手記者には貴重な経験になっただろう。だが、いずれも「負の連鎖」の延長線上にあり、近年の政治の劣化に起因すると言えなくもない。例えば、平成5年(1993)に細川非自民連立政権が誕生した際の高揚感や、わくわく感がないことに寂しさを感じたのは筆者だけだろうか。

ともあれ来秋までに解散・総選挙も予想される。筋書きなき政治ドラマに泣き笑う日は終わらない。

たかぎ・けいいち 1991年入社 モスクワ特派員 野党 官邸 与党各キヤップなどを経て 10月から再び官邸キヤップ



まさかの連続……政治部総力戦

「ブツツン」という言葉を小沢民主党代表が知っていたことにも驚いたが、一連の辞意撤回騒動で何より重く感じたのは、2大政党の党首がそろって平時では想像のつかない行動に駆り立てられた現実だ。

「逆転国会のプレッシャーは想像を絶する」。安倍前首相が政権を投げ出す壮絶なアクシデントから始まったこの臨時国会にあたり、そう心した。トップは生身の人間だ。思い詰めれば、すつとんきょうな行動に出たっておかしくはない。「いつだれ的首が飛ぶかわからないぞ」とクラブ員を脅してきたものだ。

それにしても、大連立の模索に失敗した民主党代表の首が飛び、それがまたくつつくとは、酔っぱらってもしいつかない「珍事」だ。

「小沢代表の緊急記者会見がセツトされた」との一報が担当記者から

入ったのは、11月4日の日曜日午後1時20分ごろ。「辞任だ」と直感し、平河や官邸など各クラブへの連絡、写真の手配をしながら、あわててタクシーに飛び乗った。

幹部同行取材で地方出張に出ていた一部の記者もとって返した。取材相手も緊急事態だ。鳩山由紀夫幹事長にいたっては、名古屋市のホテルで当日の早朝に「小沢一郎の使い」を名乗る側近から辞表を受け取ったばかり。それぞれ血相を変えて上京し、午後4時半にずれ込んだ会見に、なんとか担当記者全員が追いつくあわただしさだった。

小沢氏は「民主党代表の職を辞することを決意し、執行部や同僚議員に進退をゆだねた」という微妙な表現で辞意を表明した。撤回に含みがあるのとれなくもない。だが、とか

3日間のブツツン劇場

野党クラブ

▼前田 直人

(朝日新聞社)



突然の*小沢流。辞任会見にカメラのフラッシュ (民主党本部 11. 4) =朝日新聞社提供

く穏やかでないうわさの立つ小沢氏の行動予測には、慎重にならざるを得なかった。

見逃せなかったのが、「小沢氏は参院議員を引き連れて離党して自民党と組むつもりだ」という見方だ。そうなれば、政局は一気に流動化する。菅直人代表代行も「だからこそ結束して慰留すべきだ」と説いて慰留運動を全党的に広げただけに、分裂警戒は欠かせなかった。

もちろん政治グループあげての総力取材で、小所帯の野党クラブ記者たちは幹部を追いかけた。しかし、どんどん辞意撤回に流れ、11月6日夜に記者が伝えてきた小沢氏の言葉

に力が抜けた。「本当に恥をさらすようだが、皆さんの意向を受けてぜひ、もう一度がんばりたい」。

3日間にわたる「ブツツン劇場」は、なぜか「青春ドラマ」に変わった。同月7日の両院議員懇談会で小沢氏は「次の総選挙で民主党政権を実現できなければ、本当に死んでも死にきれない」と涙を見せた。議員から万雷の拍手が起き、渡部恒三元衆院副議長の温かみあるあいさつもあり、ついつい感動してしまった記者もいたようだ。小沢氏にさんざん振り回されたはずなのに……。

ところが、テレビジャックが続いたせいか、「小沢劇場」が効果的だったのか。民主党支持率は下がるところか一部では上がった。対岸の火事を眺めていた与党を驚かせ、おまけに大阪市長選まで勝ってしまった。これまた「珍事」である。

ともあれ、安倍前首相に続いて小沢代表と、党首を次々とおかしくした逆転国会の魔力。「ひげをそったらか何か起こる」とおびえて野武士みたいになっていた記者はようやくひげをそったが、平穏な日々がくるとは到底思えない。

まえだ・なおと 1992年入社 山口支局 西部本社社会部などを経て 07年から野党クラブキャップ

日本民間放送連盟賞

テレビ報道 最優秀

私にとつてのリアルな夕張 破綻の単純化に違和感

▼後藤 一也

(北海道文化放送)

昨年、財政破綻の町として「夕張」は全国的なニュースとなった。「自己責任」と単純化する風潮に違和感を感じた。テレビ画面に登場するのは「不幸な住民」と「悪い市職員」ばかり。どのチャンネルも同じような夕張を映し出していた。

私は昨年、夕張破綻が連日報道される中、4年間勤めた東京から札幌に転勤になった。久しぶりに戻った北海道は様変わりしていた。夕張だけではなく、あちこちで街は衰退していた。同じ日本でありながら、中央と地方が逆、の方向に進み始め、中央も地方も互いに対する想像力を失っているかのよう思えた。

ドキュメンタリー
石炭奇想曲
夕張、東京、そしてベトナム

日本はいったいどんな国に変質したのか。夕張から見える日本の姿を描きたらと思った。東

京から夕張に流れ住むかのごとく、小型ビデオカメラを片手に、夕張の小さな集落に半年間通い続けた。

■「石炭」をキーワードに取材

ところが、実際に撮影に入ると、夕張だけにカメラを向けても、なぜか日本全体が描けない気がした。何が足りないのだ。夕張だけを描いても、東京の人々には、まるでパレスチナ報道のように、遠い外国の不幸な出来事のようにしか感じられないのではないかと思った。

直感的に、夕張の過去の象徴である石炭の行方が気になり、取材を始めた。日本は過去最高の石炭消費量を記録していた。電気の4分の1を石炭が作り出し、電車の4本に1本を石炭が動かしていた。日本政府は安い石炭を求めベトナムに新しい炭鉱を確保しようとしていた。ベトナムにかつての夕張のような炭鉱町が出現していた。夕張で失い続ける

人々。その生活を外国の出来事のように想像がつかなくなっている東京の人々。低賃金ながら希望を抱いて暮らすベトナムの人々。一見全く関係がない3つの場所を「石炭」というキーワードで見直すと、世界は「石炭狂想曲」ともいえる状況になっていた。私たち日本人は石炭は過去のものであるという前提で夕張を見ていたのに。

構成・編集はできるだけ視聴者の想像の余地を残すことを心がけた。

2年前、あるドキュメンタリーを制作した時に、上映会や講演に何度か呼ばれた。この時、視聴者は同質なマスでは決してなく、多様な価値観を持つひとりひとりの人間なのだとして初めて気づいた。ドキュメンタリーは、決して作り手の一方的なメッセージではなく、視聴者の想像力も含めて完結するのではないか。今回の番組はそんな思いを込めて作った。石炭をめぐる3つの場所に生きる人々の人生を交錯させることで、視聴者にもう一度、夕張問題について想像して欲しいと思った。

テレビの影響は絶大である。夕張問題に限らず、テレビが描く世界は、遠く離れた場所に住む人間にとつてはそれが現実になってしまう。ましてどのチャンネルも同じような映像が流れている現状では、なおさらだ

と思う。しかも、全国ネットで流れる地方のニュースは、すべて東京のキー局の視点で取捨選択されたものだ。テレビが作り出す現実はいかに均質的で単純になってはいないだろうか。それを見た視聴者は世界の現実さえ、つまらないものを感じかねないのではないだろうか。

■境界から個人の眼差しで

ドキュメンタリーの現場にいると世界はそんなに単純じゃないという思いにいつもかられる。もちろん私が描いた夕張が正しい現実の夕張というわけではない。あくまでも「私にとつてのリアルな夕張」であり、私の個人的なまなざしで捉えた夕張の一面に過ぎない。

しかし、テレビの中の現実がこれほど均質的になって今、中央メディアではなく境界から個人のまなざしでドキュメンタリーを作り続ける意義はあるのではないかと最近感じていた。それが、テレビの中の現実を少しでも複雑で豊かなものにするのかもしれないのだから。

ごとう・かずや 地方紙を経て、1998年入社 東京支社報道部 06年報道制作局
フジテレビの深夜番組「FNSドキュメンタリー大賞」で一月末までに放送予定
(放送日はフジテレビのホームページに)

ワリード・マハムード・アブデ
 ナーセル 駐日エジプト大使

11・1(木) 記者会見 司会 脇祐三
 委員 通訳 池田薫 出席 28人

▼地域の安定剤として

ナイル川とピラミッド。エジプトは日本人にとって、アラブ世界の代表国家であり続ける。10月に着任した新大使は昨年まで駐米次席大使。エジプト外交にとり、重要な日米両国を続けて担当することに、着任早々から張り切っていると聞く。



エジプトにしか切れないカードがある。レバノン、スーダン・ダルフール危機をはじめ、縁の下で力を尽くす同胞外交官の努力を強調した。新大使はジュネーブ駐在を10年務め、外務大臣官房でアジア地域を担当している。日本で長期駐在は初めて。前任のパドル大使がエジプト外務省きつての本通で知られたのに対し、オール・ラウンド型のベテラン外交官らしい持ち味を期待される。

「エジプトの役割は地域の安定剤。ただし、日本や米国、欧州連合(EU)との協調なしには、その役割を果たせない」。イラク戦争、イスラエル・パレスチナ紛争、レバノン危機、イラン核疑惑、クルド問題：火ダネの絶えない中東地域で、エジプトの存在感と政治力は頼みの綱だが、サウジアラビアなど湾岸産油国の声が一段と強まるにつれ、相対的な地盤沈下の印象も否定できない。その点を司会の脇委員に質問されると、「中東もアラブ世界も50年前とは違う。経済も多様化した。多くの国に活躍できる場ができたが、エ

ジプトにしか切れないカードがある。レバノン、スーダン・ダルフール危機をはじめ、縁の下で力を尽くす同胞外交官の努力を強調した。

新大使はジュネーブ駐在を10年務め、外務大臣官房でアジア地域を担当している。日本で長期駐在は初めて。前任のパドル大使がエジプト外務省きつての本通で知られたのに対し、オール・ラウンド型のベテラン外交官らしい持ち味を期待される。

「エジプトも日本も、古代国家、つまり何千年も存在してきた。だから、地域で力を発揮できる」と大使は述べる。確かに、拠り所となる相手国を欠くと、一国の地域外交は機動性を失う。その点で、アラブ、アフリカ地域で重きをなし、イスラム文明の代表国家、観光大国、教育・人材交流の主要相手国として、エジプトの位置づけをいま一度、とらえ直してほしい。新大使のメッセージをそう受けとめた。

読売新聞調査研究本部主任研究員

池村 俊郎

ふるや じゅん
 古矢 旬 東京大学教授

11・2(金) 研究会「アメリカの底流⑦ アメリカの政治思想再確認」司会 中井良則委員 出席 88人

▼ヒラリー・クリントン優位の背景

ブッシュ大統領の後継者を決める米大統領選挙まであと1年。初の女性大統領を目指すヒラリー・クリントン上院議員を中心にした選挙戦の行方に興味は尽きない。昨年の中間選挙での民主党勝利で、「米国の政治は保守からリベラルへ大きく転換した」との指摘もなされたが、本当にそうなのだろうか？

ニューデイル以降の米国政治の底流を研究する古矢教授は「グラスルーツで世論の大きな変化があったわけではない」として、「何十年に一度の大変化を起こしたとは思えない。むしろ保守的な潮流は徐々にしか変わっていない」と分析する。



ここまでの選挙戦でのクリントン氏の優位についても、古矢教授はリベラル路線ではなく、中道路線を取ったことが奏功しているとみる。

確かに「前世紀の真ん中に、アメリカの中央で、中産階級の家になられた」と「ミドル」を強調するクリントン氏は、保守的な言葉でリーダーシップを語る場面が目立つ。

古矢教授によると、それはライバルのオバマ上院議員のおかげだという。「黒人ということもあり、オバマが左に立ってくれているおかげで、クリントンは安心して中央に動いて活動できる。もしオバマがいなければ、クリントンは「転向」ということを言われる。今のクリントンの成功を助けているのは、皮肉なことに、前半でのオバマの成功」と、教授は語る。

ルーズベルトのニューデイル連合は、レーガン革命で形成された保守連合にとって代われ、その流れはブッシュ現政権下の保守主義へと連なる。「思想的対抗軸のない純化されたレーガニズム」(古矢教授)と位置付けられる現在の保守主義が次の大統領を選ぶ過程でどう変わっていくのか、目を凝らす必要がある。

共同通信外信部次長 沢井 俊光

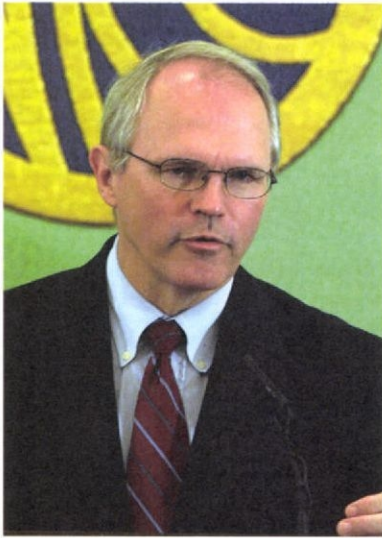
クリストファー・ヒル
米國務次官補

11・3 (土) 記者会見 司会 船橋洋一委員長 通訳
池田薫 森岡幹子 出席 129人 写真 朝日新聞社

▼職業外交官の自負

日本は何回も訪れているが、クラブの記者会見が初めて実現した。休日だったが、関心は高く、ワシントン特派員の「ヒル番」同行記者や外国プレスも熱心に質問した。ナショナル・プレスクラブとしての役割を日本記者クラブが発揮できた。

ヒル氏が6カ国協議を担当するようになり、米国の北朝鮮外交は対立から宥和に転換したと批判される。とりわけ、拉致事件で北朝鮮を信用しない日本では「北にまただまされるのでは」と警戒心が先に立つ。だが、ヒル氏の立場は、外交による北朝鮮の非核化は可能だし、それを追求するしかない、というものだ



ろう。それもブッシュ政権の任期中に、という締め切りがある。

こんな答えが印象に残った。「何かを得ようとすれば、何かを与えなければならぬ。これは交渉だ。タフな交渉だ。私は外交官として何度もやってきた。これほど難しいものはなかったが」

「関与を続けることがとても必要だ。もし外交プロセスから手を引くというのなら、どこへ向かうのかを尋ねなければならぬ。目標を達成する私たちの戦略は外交活動だ」「外交政策において私はプラグマティストだし、それを誇っている。このゲームを30年やってきた」

またまれば歴史に残る外交の勝利と称賛され、失敗すれば「やはり甘かった」と非難される。でも、私たちが騒ぐほどには、本人は楽観的にも悲観的にもなっていないのだろう。意外に淡々と、職業外交官の命じられた職務として対北朝鮮交渉を重ねてきているような気がする。

毎日新聞論説副委員長

中井 良則

しのはら なおゆき
篠原 尚之 財務官

11・5 (月) 記者会見 司会
小此木潔委員 出席 77人

▼金融市場混乱 自律的調整へ



歴代財務官には個性の強い人が多。通貨マフィアといえ海千山千のつわもの揃いだ。日本の言い分を通していくためには、出過ぎるぐらいでなければ務まらなかったことは間違いない。7月に財務官に就いた篠原氏も個性は強いものの、市場を無理矢理ねじ伏せるといった考え方は持ち合わせていない。市場重視派である。為替市場介入も「乱高下をなだらかにするぐらいのこと」と、市場の自己調整能力に信を置く。

渡辺博史前財務官時代に為替市場介入はゼロだったが、篠原時代も円売り介入の場面はまずなさそうだ。こうした考え方は、旧国際金融局、国際局で総務課長、次長、局長と要職を歴任し、国際機関も経験する中

で、おのずと身に付いたのだろう。10月19日の先進7カ国財務相・中央銀行総裁会議(G7)は、時節柄、米国のサブプライムローン問題やそれに端を発した金融市場の混乱が最大のテーマだった。その点に関して、篠原氏は明快である。「住宅市場の調整には相当の時間が必要だ。しかし、金融市場の混乱収束にはそう時間はかからない」という。サブプライムローンを組み込んだ証券化商品はそう多くはないからというが、市場は自律的に調整するという信念が根底にあるが故の発言だろう。

産油国などの政府が余資で組成しているソブリン・ウエルズ・ファンドの規制についても、「どこか抑え込もうとすると副作用の方が大きい」という立場だ。「市場は足の速い資金、足の遅い資金などいろいろあつて弾力性が出る」という発言も市場重視論者ならではのものだ。

来年の洞爺湖サミットに向け、篠原氏が世界の不均衡は正や投機資金規制でどのようなインシアチブを発揮するのか注目したい。

毎日新聞論説委員 今松 英悦

おおた あきひろ
太田 昭宏 公明党代表



11・7(水)昼食会 司会 渡辺興二郎理事
倉重篤郎委員 出席 105人

▼中選挙区制復活論に熱弁

福田首相(自民党総裁)と民主党の小沢代表との間で「大連立」構想を前提に政策協議に入ることと合意しながら、民主党役員会の反対で挫折。小沢代表が引責辞任を表明し、さらに辞意を撤回する……。こうした一連の騒動の直後とあって、公明党の太田代表の登場は、絶妙のタイミングになった。

公明党は、大連立を支持できないのではないかと。党の埋没につながるのではないかと。

会場は、こうした質問を心の中に用意していたはずだ。

これに対し、太田氏は「党首会談を評価したい」と明言した。

その理由として、「衆参ねじれ国会の中で政策を実現していくために

は、与野党の合意形成を図る必要がある。選択肢のひとつが今回の党首会談、大連立だった」と説明した。

党の存在感についても、仮に大連立になっても政権中枢に公明党の「庶民の視点」があることになり、とその意義を強調した。

それは建前に過ぎないのではないかと、と思った通り、太田氏の真意はその後の質疑で判明する。

太田氏は「今の選挙制度の下で、大連立が実現するかどうかは、民主党がなかなか難しからう」と読み、まず実現性を疑っていたのだ。

さらに、最も熱弁をふるったのが衆院の中選挙区制復活論だった。

「大連立を構想している方たちは中選挙区制を含んで構想を示してき

ている。人の要素を入れた比例代表という意味での中選挙区制、政策の勉強、蓄積が評価される中選挙区制をぜひ実現したい」

太田氏は、今度の大連立構想を、定数3の150中選挙区という年来の主張を再び唱えるいい機会、ととらえたのだろう。

読売新聞編集局次長 小田 尚

しもとまい のぶお
下斗米 伸夫 法政大学教授

11・7(水)研究会「ロシア⑥」ロシア政治概論 司会 宮田謙一委員 出席 86人

▼90年の時空を超え縦横な概論

ロシア社会主義革命90周年記念日に当たる11月7日、レーニンからプーチン、そしてポスト・プーチンまで豊富な知識とユニークな歴史観に沿って、90年の時空を超えて縦横に語ってもらった。

「1917年のボルシェビキ革命を主導したグループは、ピョートル大帝のロシア正教会改革に抵抗した古儀式派の流れを汲む人たちだ。最初にソビエト(会議)が誕生したモスクワ東部のイワノボは古儀式派の拠点だった。ロシア革命は労働者・農民の革命というより、隠れキリシタンに似た古儀式派の影響がある」との指摘は興味深い。



ソ連時代のモロトフ外相やイデオログのスターリンからも古儀式派と関係があったという。古儀式派は「土地は

神のもの」とみなしており、ソ連解体後に資源奪奪を図ったオリガルヒ(新興財閥)はこの流れに反したのだ。

旧ソ連と現在のロシアの比較について、「閉鎖型ソ連時代のエリート序列は、軍・農・鉱・商の順で、いわば「土農工商」だったが、エネルギー主導の現在のロシアは、鉱・金融・軍・農の格付けに変わった」との分析もなるほどと思わせた。

ソ連・ロシアの指導者が必ず前任者を批判ないし否定してきた経緯に触れながら、プーチンがエリツィン前政権を反面教師にした実態を紹介。「ゴルバチョフ、エリツィン時代と違って、石油価格高騰に恵まれたプーチンは幸運な改革派。統治は成功したと位置付けられる」と評価した。

そのプーチンは今、「今年の大統領教書で産業政策を重視した。資源依存の『北のサウジアラビア』からの脱却を狙う」と分析。プーチン後については、いくつかの選択肢を挙げながら、「来年5月の大統領選陣営をもってプーチン時代が終わるとはいえない」と締めくくった。

時事通信外信部長 名越 健郎

御手洗 富士夫

日本経団連会長

11・8(木)昼食会 司会 住田良能理事
長谷部剛委員 出席 107人

▼現実的方策として大連立を評価

絶妙のタイミングでの会見になった。福田康夫首相との党首会談で連立協議に踏み込んだ民主党の小沢一郎代表が、辞意表明から辞意撤回へと揺れ動いた直後である。

「小沢代表が連立の問題を出したのは、政治家の責任として(国政の停滞の)解決に乗り出したというこ



とで高く評価する。残念ながら、大連立は消えたが、これを契機に政策協議の機運が出てきた」

こう受け止めるのは、「国会はねじれ状態だが、日本が直面する諸課題を解決するには、政治のリーダーシップが欠かせない」と考え、現状を打開する現実的な方策として連立をとらえているからだろう。昨年5月に経団連会長に就任して18カ国を訪問し、「各国が自国の競争力強化に懸命なのをつぶさに見た」。「世界の成長競争の中で、日本は少しずつ落ちているのではないかと焦燥感を覚える」という。

「一人当たりの所得でみたら、日本は今や先進国の中で並みの国だ」。

「イノベーションを加速する必要がある」として、研究開発投資減税の拡充や法人税の引き下げなどの必要性を訴えた。社会保障問題では「基礎年金の全額税方式も選択肢に入れて議論すべきで、年明け早々にも年金改革についての経団連の考え方を世に問いたい」と述べた。

最終的には政治が鍵で、御手洗会長自身も認めるとおり国民の理解を得られるかどうかにかかっている。会長を務めるキヤノンは朝日新聞に企業広告の掲載を止めている。この件についての質問には、「言論の自由がどうのこのうの問題ではない。企業広告は企業イメージを上げるためで、相乗作用がある場所か相殺作用がある場所か、どちらに出すのかという効率の問題だ」と答えた。

日本経済新聞特別編集委員兼論説委員
森 一夫

ミハイル・M・ベールイ
駐日ロシア大使

11・12(月)昼食会 金平茂紀理事 宮田謙一委員
通訳 吉岡ゆき 出席 71人

▼3つのステレオタイプからの脱却

ベールイ氏が駐日ロシア特命全権大使に就任して約10カ月。日本記者クラブでの初会見の機会を「名譽」と表現したのも、あながち社交辞令ではなかったのかもしれない。とかくロシアがマイナスイメージで日本メディアに登場することが多いと実感していたのだろう。「ロシアの客観的情報を伝えるのが私の任務だ」と述べ、「3つのステレオタイプからの脱却」を強く訴えた。

「ロシアはかつての全体主義ソ連と何ら変わらない」「ロシアは今も先進国からの経済協力を必要としている」「新しいロシアは帝國的的政策に戻っている」。大使は、これらのステレオタイプが今も残り、い



ずれも根柢なく考えられたものだと言った。その概要はこうだ。

ソ連崩

壊後、90年代のロシアは痛みの伴う制度改革の渦中にあり、弱った国だ。つらい時期には外からの支援も必要だった。やっと今、経済的にも体力を回復し、安定を取り戻し、国益を守り、国際社会でしっかりとした地位を占められるようになった。そのことが、帝國的復活と叫び換えられている。

大使はまた、ロシアは武力行使決定の鍵を国連に置くが、一部の大国は一極支配を試みて世界を不安定化させたと指摘し、イラクの例を挙げ、暗に米国を批判した。言論の自由が後退したとの西側からの批判についても、「あらかじめ作った結論に事象を当てはめていくやり方だ」と反論。自由だったと言われる90年代のマスコミの実態は、質的にも責任感の面でも問題があったと述べた。

日ロの領土問題では、相互に受け入れ可能な解決策を訴え、ここでもマスコミの影響に言及した。質疑応答も含め昼食会は予定を30分近くもオーバー。「ロシアの伝道師」としての使命感は見えた気がした。

朝日新聞外交・国際グループ次長
副島 英樹

ウィリアム・C・ラムゼー IEA事務次長

▼CO₂削減 この10年が大切



ラムゼー IEA事務次長は「もう時間がな
い！おし
やべりは
これくら
いにしてアクションを起こす時だ」と締めくくった。

IEAがこのほどまとめた「世界のエネルギー見通し2007」によると、中国・インドなど新興工業国の急成長を主な理由として、2030年のエネルギー需要とエネルギー関連の二酸化炭素(CO₂)排出量はいずれも現在より50%以上増大し、気候変動とエネルギー安全保障への不安は高まる。「これは持続不可能」(事務次長)なのは当然だ。

エネルギー需要は毎年1・8%伸び、30年には05年比55%増える。増加分の45%を中国・インド2国で占める。中国は10年の直後に、米国の抜いて世界一の消費国になる。2国の発電需要の高まりで石炭の需要が

11・12(月)記者会見「世界エネルギー見通し」
司会 脇祐三委員 通訳 池田薫 出席 89人

増え30年には05年比73%増。
「石炭がこんなに伸びるシナリオを描いたのは今回が初めて」(同)

という。石炭は埋蔵量は多いがCO₂をたくさん排出する。30年の世界のCO₂排出量は05年比1・6倍の419億トに膨らむ。国別では中国が07年に米国を抜いて世界一になる。30年時点では中国114億ト、米国69億ト、インド33億トの順。

IEAはエネルギーを輸入に頼る先進国の組織であり、中国もインドもメンバーではない。そして「中国・インドに経済成長の抑制を求めることは世界の利益に反する」(同)という原則に立つ。となると、各国政府が進めている1500の政策をすべて実施する代替政策シナリオに頼らざるを得ない。そうすれば、CO₂排出量は20年代半ばに安定する。

だが、大型発電所は建設に長期間かかり、いったん動けば寿命は数十年。クリーン石炭火力発電所を作るにしても、今すぐ着手しないとけない。ラムゼー事務次長は、「今後10年が大切なのだ」と繰り返した。

毎日新聞出身 ガスエネルギー
新聞常務 今井 伸

リチャード・ハース 米外交問題 評議会会長

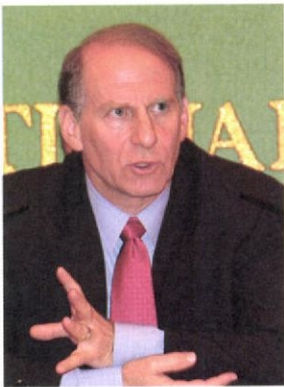
▼分断された国家意思に憂慮

場慣れた受け答えは、さすがに外交のプロである。プレゼンテーション後の質疑応答では、米外交はもちろん、アジア、中東情勢に至るまで幅広い質問に即座に、的確に答える。

出席者の立場で言えば、やはり気になるのは今の日本外交をアメリカの識者がどのような目で見ているかという点だった。

ハース米外交問題評議会(CFR)会長は、アフガニスタンにおけるテロ対策の一環、インド洋上での海上自衛隊の給油活動が中断された一件を自ら取り上げた。

「きょうの国会論議を聞いても明らかだが、日本は今、世界でどのような役割を果たすべきなのかを、ま



11・13(火)記者会見 司会 会田弘毅
委員 通訳 澄田美都子 出席 82人

とめて整理していく必要がある」
原理・原則が希薄な日本外交に対する厳しい批判と言えるだろう。

質問にはこう答えた。
「(日本の給油中断について)アメリカの反応は、失望ということになるでしょう。政治的意味合いで言えば、日本はアメリカが期待するグローバルな行動が出来なかったという(世界への)シグナルになる」

「ある国の影響力とか、ある国の重みというのは、その国に行動の意思と能力がどの程度あるかに比例して決まっていくものだ」

アメリカの世論を喚起・形成するワシントン、ニューヨークなどの識者たちの本音が、はっきりと見て取れる。

今は、給油中断をめぐる問題で国論が揺れ動く日本外交の正念場でもある。2年前の郵政解散―総選挙、続く今年夏の参院選が生んだ「ねじれ国会」。ハース氏の言葉の裏には、分断された国家意思の下で再び漂流し始めた同盟国、日本に対する憂慮の念がにじみ出ている。

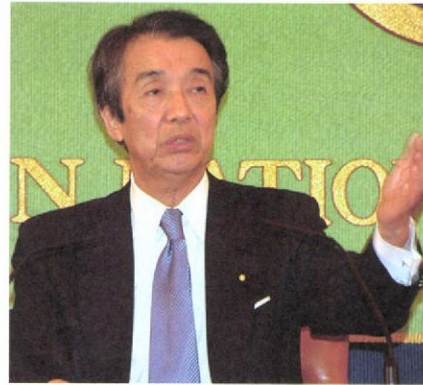
時事通信解説委員 鈴木 美勝

伊吹 文明 自民党幹事長

11・14(水) 記者会見 司会 川戸恵子委員
出席 121人

未知の国会。仕切る戦略は？

新テロ対策特別措置法案が前日の11月13日に衆院を通過し、「ねじれ国会」の主戦場となる参院での審議がいつ始まるかという時点での会見だった。聞きたいのはもちろん「再延長」「再議決」という国会対応。しかし「私が答えたら幹事長失格だ」とはぐらかした。「参院の幹部が『60日延長』と言っただけで大変なことになっている」と微妙な時期であることを言い訳にしたが、もうひと言踏み込んでもらいたかった。



「これまでの常識が非常識になった」というフレーズが最近、伊吹氏のお気に入りのようだ。与党が衆参両院を支配している時とは様変わりした「未知の国会」を仕切る幹事長の苦しみなのだろう。この日もこの言葉を繰り返した。

自民党の国会、政局対応の方針が

はつきりしない中で、幹事長として福田首相とどこまで意思疎通ができていのか疑問だ。首相と小沢民主党代表との党首会談の際も大連立協議を事前には聞かされていなかったようだ。会見では「次の衆院選に勝った方のグループが主導権を持ちながら、負けたグループに政界再編を仕掛けて状況を変えていくだろう」と語ったが、単に評論家的な見通しなのか、自民党の幹事長として明確な戦略に基づいた発言なのか分からない。

ただ「来年、消費税を上げることは自民党としては行わない」と消費税増税の見送りを明言し、ニュースを提供することは忘れなかった。我々に向かって「諸先輩の方々」と繰り返す如才のなさが伊吹氏の持ち味なのだろう。しかし幹事長の職責はそれだけでは務まらない。自民党が政権を明け渡す恐れのある衆院解散・総選挙に向けて、今度は幹事長の緻密な戦略を聞きたい。

共同通信編集委員

川上 高志

斉藤 惇 東京証券取引所社長

11・16(金) 昼食会 司会 熊坂隆光理事
長谷川幸洋委員 出席 71人

日本経済の復権を

とにかく雄弁な人である。日本経済の課題から東京市場の問題まで、ある時は外国の例を引き合いに出し、ある時は歴史のなうんちくを披露して、自由自在に持論を展開した。



るとは言いながら、私自身狭い枠組みに閉じこもりそうになるので、話を聞きながら大いに反省したものだ。雄弁な日本経済論に対して、東証は日本復権のために何をするかという課題には、「出来ることは限られている」と控えめであった。プロ

斉藤さんの最大の主張は、「栄光の座から転落した日本経済を、何とか復権させたい」ということである。かつて、一人当たりのGDPが世界一だったのに、今や18位に転落して普通の国になってしまった日本。こんな現実に危機意識を持たないことこそ、日本の問題だと訴える。

のために特別な市場を作りたいと言ったのが唯一の具体策で、これはちょっと期待はずれであった。確かに、市場経済と言っても東証は脇役だし、出来ることは限られているのは確かである。株式市場の主役は投資家であり企業だからだ。

話の中で、私が一番共感したのは、日本人は問題を「日本という小さなコップの中でしか考えよう」としない。そうではなくて、世界という大きな枠組みの中で見てほしい」という訴えだった。私も若い人たちに、問題を考えるとき、歴史的な視点で見直し、外国と比較して世界中での位置をつかむよう話してい

前にお目にかかった時、「世界の常識を東証に植え付けたい」と話していた。世界に目をといてこの日の訴えは、危機意識を持たず挑戦もしないでぬくぬくと過ごしている、日本の経営者や投資家への痛烈な批判というわけだろう。

NHK解説委員室専門委員

山田 伸二

上野 俊彦 上智大学教授

ロシアの07-08選挙サイクル



ロシア
の下院選
(12月2
日) 投票
開票直前
だったの
で、演題

そのものがジャーナリストらの関心を呼んだ。

最初に上野教授は「大上段に構えた議論は得意でない」といいながら、欧米諸国から盛んに指摘されたロシアの「民主化後退論」を組上あげた。批判が暗黙のモデルを想定して行われていると指摘、「社会は異なる歴史と文化を持っているので、一つのモデルをあてはめて議論するのは生産的でない」と一蹴した。

さらに、「民主化の後退や権威主義化などのレッテルを貼って政治を理解していると思いきむのは間違」と決め付け、客観的事実を丹念に見ていく大切さを強調した。

続いて選挙制度と選挙に関する世論調査をリンクさせ、見どころを説明した。今回から小選挙区制がなく

11・16(金)研究会「ロシア⑦ 下院選挙の行方」
司会 石郷岡建委員 出席 57人

なり比例代表制一本になるうえ、得票率7%以上の政党に議席が配分される。前回までは得票率5%で議席が配分されたので「非民主的」との指摘もあるが、上野教授は「政党数を減らすため、今回最大で4党、場合は2党が共産党で、政権交代の題は第2党が共産党で、政権交代の受け皿にならないことだ。ただ、地域別に候補者名簿を提出するので、地域密着型の選挙運動が行われることには変わらない」と分析した。

また、プーチン大統領が与党「統一ロシア」の候補者名簿第1位に搭載され、大統領の信任投票の様相となっている。上野教授は「大統領に批判的な人は投票しないだろうから、ソ連時代同様、投票率が注目される選挙になった」と指摘した。

来年3月の大統領選については予想を避けたが、「間違いないのは、クレムリンが選んだ候補が当選すること」と述べた。とらえどころのないロシアの政治を選挙の仕組みや世論調査から割り出していく緻密な手法に学ぶところが多かった。

毎日新聞外信部編集委員

飯島 一孝

鳩山由紀夫 民主党幹事長

衆院選勝利—単純な図式なし

大連立騒ぎでの支持急落は何とか免れた——。鳩山幹事長の言葉の端々には、そんな安堵が見て取れた。唐突な大連立話の頓挫とそれに続く小沢一郎代表の辞意表明、そして撤回。「党へのダメージは計り知れない」との評価もあったが、あにはからんや、一部の世論調査では支持率が上昇し、

会見前日の大阪市長選でも勝利を飾ったからだ。

「昔の民主党で、代表が辞めるべきだとの状況になったら、すぐに『次はだれか』と動きだし、收拾がつかなくなっていた」。鳩山氏は、自らの代表時代のことも含めてこう振り返ったうえで、「民主党も、それなりに成長したのではないかと胸を張った。とはいえ、党の先行きが明るいと

は、決して言えないのも事実だ。小沢氏は大連立について、朝日新

11・19(月)昼食会 司会 宇治敏彦副理事長
影山日出夫委員 出席 18人

聞のインタビュで「選挙で勝てる最大の方策で、自分の政治判断は今でも正しいと思っている」と力説している。政権入りし、政策を実現させることが衆院選勝利への道だとの理屈だが、鳩山氏の見立ては「そんな単純な図式はあり得ない」。党内の火種はくすぶったままだ。鳩山氏は、次の総選挙後の政権戦略について、こうも語った。

「民主党が第一党になれば、過半数はとれていなくても、第一党を中心として連立政権を考えるのが憲政の常道だ。それが大連立になるとは考えにくい」。一方で、「自民党の中で政権の方向性が望ましくないとと思う方々がいるのなら、そういう方々との連携はあり得る話だ」。

鳩山氏の言うように、目標とする過半数の小選挙区での勝利は、「非常に難関」だ。大連立に突き進んだ小沢氏を押しとどめた以上、選挙のかじを取る鳩山氏の責任は重い。朝日新聞論説委員 国分 高史

アンワルルハック・アハデイ アフガニスタン財務相

11・21(水) 記者会見 司会 矢島誠司
委員 通訳 小松達也 出席 40人

▼成果が見られない麻薬対策

「GNPはこの5年で2倍」「歳入は3年で400%増えた」。アフガニスタンのアハデイ財務相は、タリバン政権崩壊後に誕生したカルザイ政権下で、経済は着実な成長を続けていることを強調した。

アハデイ氏はカルザイ政権で中央銀行総裁、2004年12月からは財務相を務めるなど、アフガン経済の中樞を担ってきた。廃虚から故国をここまで立ち直らせたという同氏の自負の表れでもあった。

だが、アハデイ氏はアフガンが直面する課題として、①国内の治安②汚職のまん延③麻薬対策―を挙げた。これらの点は、これまで繰り返して指摘されてきたものばかりで、今



に始まったわけではない。

中でも麻薬に関しては、国連薬物犯罪事務所がことし8月、アフガンのケシ耕作地面積は過去最高を更新したとの調査結果を発表。「世界一の麻薬生産国」という側面を持つアフガンに支援を続けている日本国民のひとりとして、「国際社会からの支援は麻薬対策分野で有効活用されているのか」と問うてみた。

アハデイ氏は、①ケシ耕作地の絶滅②警察による密輸取り締まり強化③ケシから代替作物への転作、を具体的な対策として列挙。昨年、ケシ耕作地2万ヘクタールを絶滅させたというが、全体的には「大した効果はない」という。成果が上がらないのはアフガン政府だけでなく、国際社会にも責任があるとのアハデイ氏の主張には違和感を覚えた。

アハデイ氏は来日中、高村外相や町村官房長官らと会談。インド洋における補給支援活動の継続やアフガンへの援助継続を訴えた。日本のアフガン支援熱はいまだ冷めておらず、「安心した」と語った。

共同通信外信部 清水健太郎

おみ しげる 尾身 茂 W H O 西太平洋事務局長

11・26(月) 記者会見 司会 迫田朋子 出席 34人

▼人々 中心の医療を

世界保健機関(WHO)西太平洋地域事務局は11月25日、東京でシンポジウムを開催、「人々 中心の医療」という宣言を打ち出した。中心となった尾身茂事務局長がシンポジウム翌日、会見した。

人中心の医療とは、尾身事務局長によると、日本で現在叫ばれている



「患者中心の医療」を、さらに一歩進め徹底させる考え方だという。

尾身氏は、WHOがアジア地域でこれを打ち出してきた背景について、「10年前だったなら、(アジアで人中心の医療とは) ぜいたくだと言われただろうが」と前置きし、アジアの著しい経済発展と、それに伴う社会の変化により市民の医療へのニーズが変質してきたことを挙げた。

たとえば、アジア地域では日本だけでなく、生活習慣病に起因する疾病が、死因の大半を占める時代になり、それらの予防、健康増進を図る制度が必要となってきた。

そのためには、病気を治療するだけが医療の仕事ではない。財政部門なども巻き込み、広い視野に立ち、人の心と体をトータルに扱う医療制度が求められているのだという。

これは日本にこそあてはまる。医療制度改革の方向性を示すもの。また、今や経済、文化、教育など多分野で日本のライバルとなった中国、韓国、東南アジアなども医療では、日本と共通の悩みを持つようになったということだろう。

一方、WHO西太平洋地域事務局といえば、2003年のSARS対策の最前線にあった。そのことに質問が出て、尾身氏は当時を振り返り、「毎日が緊張の連続で、戦場のようない気がした」と語っていた。

日本政府は医療、保健衛生の分野で、もっと国際貢献を考えよう。戦車や軍艦をそろえるだけが、国と国民を守るのではないのだから。

東京新聞生活部 草間 俊介

グエン・ミン・チエツト ベトナム国家主席

▼経済連携協定来年が節目

「経済連携協定の時期としては両国が国交を樹立して35年目にあたる来年をひとつのメドとしたい」
日本とベトナム間の経済関係強化について語るベトナムのグエン・ミン・チエツト国家主席は雄弁だった。

ベトナム商工会

議所によれば、今回の国家主席の訪日にはベトナムの企業110社が同行。舞台裏での商談が行われた。これに心えて訪日中に、日本側は、三菱重工業が航空機部品工場の建設を決め、NTTコムユニケーションズは現地にデータセンターを整備する意向を表明した。

会見では、こうした成果を誇示するかのように日・ベトナム投資協定や今年1月にベトナムが世界貿易機関(WTO)に正式加盟するなど投資環境が整備されたことを挙げた。

ベトナムは、日本企業によるアジア



11・28(水) 記者会見 司会 滝鼻卓雄
理事長 通訳 グエン・カオン・ルオン
在日ベトナム大使館参事官 出席 106人

における供給体制見直しの動きを十分に認識している。いわゆる「チャイナ＋1」と表現される中国への集中的な投資リスクを分散する日本企業の動きのことだが、これに対して素早い対応をしているベトナム政府の意図が強く感じられた。

だが、経済面での積極発言とは裏腹に、政治・外交面での発言は曖昧さが目立った。中国との関係を問われ「日増しに仲良くなれるように頑張っている」と抽象的な表現にとどまった。

ベトナムは、来年から2年間、国連安全保障理事会の非常任理事国を務める。日本人拉致問題の解決などで北

朝鮮への働きかけに対する期待も高い。日本は、政府開発援助(ODA)を拡大し、今後、一段と政治的な緊密度を強める方向だが、経済協力をテコに外交的な成果をバランスさせ姿勢も忘れてはならないだろう。

産経新聞経済本部編集委員

気仙 英郎

ダーモット・アハーン アイルランド外相

▼外交・国際貢献でも、大国

アイルランドというと、のどかな農村や放牧の光景を頭に描いてしまふ。だが、アハーン外相は「ソフトの世界3大輸出国」に象徴される、めざましい経済発展の国として母国を紹介した。「ダイナミックで競争力をもつ経済の国」「熟練労働力の国」。



11・29(木) 司会 宮田謙一委員
通訳 小松達也 出席 46人

北アイルランド紛争を英国とともに解決に導きつつある体験や知恵がある。「この知識を他の地域の紛争(解決)に役立てたい」とも。人口420万の国ながら、レバノン、コンボ、チャドなどの国連平和維持活動に多くの要員を派遣している。中立性の強い独自の外交政策を掲げ、世界各地の紛争解決にも積極的だ。

日本との外交関係樹立50周年を機会に来日した。戦後日本の復興を「何ごとにもベストを尽くす精神があった」とたたえ、「この精神をアイルランドも共有」と、わずか2世代のうちに農業主体の国からハイテク国へと変身した歩みを語った。いま、この国の国民1人当たりのGDPは3万6千800ユーロ。EUでも、もつとも高い経済水準を誇る。

「強い経済をもつ国には、途上国を支援する責任がある」と同国の「哲学」も披露した。国連活動などを通じて途上国の支援や安定に力を注ぐことが外交の柱になっている。平和構築についても、怨念の歴史をもつ

アフガニスタンでは、国連が権限付与した国際治安支援部隊(ISAFF)に少数ながら要員を派遣している。だが米英主導の「不朽の自由作戦(OEF)」には参加していない。日本とは逆の形だ。理由をたずねると、アイルランドの軍事活動についての「3原則」(トリプル・ロックの原則)をあげた。政府の承認、議会の承認、そして国連のマンデート(権限付与)だ。国連マンデートがない活動には加わらないということだ。人口や軍事力では小国だが、外交や国際貢献についても、なかなかの「大国」を感じさせる外相会見だった。

朝日新聞出身

百瀬 和元

よしむら
ひろと
警察庁長官



11・30(金) 昼食会 司会 朝比奈豊理事
普沼堅吉委員 出席 68人

▼全面的「可視化」導入は否定

私はテレビ局に勤めながら、「カメラ」というものが苦手だ。どうも、向けられると妙に緊張する。

今や日本人総カメラ時代といってもおかしくないくらい、この「カメラ」というものが普及しているが、昔では予想もできなかった場面でも登場しようとしている。

そういう意味で、警察を取り巻く現状は厳しい。裁判員制度のスタートを前に、取り調べを録音・録画する「可視化」の議論が加速しているからだ。

かねてから可視化導入に「慎重論」を表明してきた吉村長官はこの日、もはや議論は避けて通れないとして「柔軟に考えたい」と語りつつも、「100%全部、録音・録画することは

到底ありえないと思う」と「全面的」な可視化には否定的な立場を強調した。

鹿児島や富山の無罪判決を受けて「取り調べの適正化」を求められる中、警察は「捜査部門以外の部門によるチェック」「取り調べ室にマイク」「のぞき窓」などを打ち出すことを検討している。

一線の捜査員は心の中を明かす。「実質的な取り調べができず、かえって事件が埋もれてしまうのでは」「個室の中で真実を引き出すにはテクニックが必要で、その技術を見られることに正直、抵抗はある」「信頼関係を作ろうとするのに相手に余計な緊張を強いることになるのでは」

手探りの日々が続きそうだ。警察庁長官が「カメラ」の前で記者の質問に答える機会は少ない。

その「カメラ」の前で、吉村長官は「警察の仕事の根っこは第一線にあることを忘れてはならないと、今ひしひしと感じる」と語り、現場に対する思いの強さをにじませた。

フジテレビジョン 社会部

弓削いく子

マイBOOK マイPR

■日本の選択へ適者Vのモデルへ

小島 明

(日本経済新聞社顧問)
21世紀新たな成長への課題 日本がバブル景気崩壊後の経済停滞のなかで内向き指向になって「眠っている間」に、世界は地経学、地政学的に歴史的なパラダイムシフトをした。まず、ようやく長期不況から脱して目覚めた日本のグローバル化する世界における立ち位置を確認し、21世紀の日本の新たな発展・成長への課題を点検する。同時に、日本が様々な制約要因を発展・成長要因に転換させてきた歴史の教訓を確認する。そこから「適者」のモデルが浮かび上がる。

(NTT出版 2310円)

■平和構築の仕事——フィンランド前大統領アハティサーリとアチエ和平交渉

脇阪 紀行・訳

(朝日新聞論説委員)
和平交渉と武装解除の舞台裏 インドネシア・アチエ紛争をめぐる和平交渉が05年に終結し、約30年ぶりの平和が訪れた。独立派ゲリラと政府との交渉を仲介したのは、フィンランド前大統領アハティサーリ氏だった。なぜ、北欧の政治家が調停に成功したのか。日本は役割を果たせなかったのか。和平交渉と武装解除の舞台裏を描いたフィンランド人記者カトゥリ・メリカリオの著書を翻訳し、そんな疑問が氷解した。理屈ばかりの平和構築論はうんざり、という方に一読をお薦めしたい。

(明石書店、2940円)

■新聞記者——疋田桂一郎とその仕事

1980年度の日本記者クラブ賞の受賞者、疋田桂一郎さんの生前の仕事をまとめた本である。朝日新聞きつての文記者といわれた文章の素晴らしさや視点の鋭さ、斬新さもさることながら、疋田さんのすごいところは、常に新聞の弱点や足りないところを考え続け、改革案を提言し、自ら実践していったことだ。これから記者を

目指す人だけでなく、すべての新聞記者にとつて最高の教科書だといえよう。「ある事件記事の間違い」など、30年前のものとは思えない優れた教材だ。こんな新聞記者もいたのだと知ってもらおうと同時に、新聞の地盤沈下がいわれるなかで、新聞もまだまだ捨てたものではないと、読んでいて力の湧いてくる本である。

(朝日選書 1260円)

朝日新聞出身 柴田 鉄治

会議報告

第370回企画委員会

(11・1 宴会場)

新委員の倉重篤郎・毎日新聞編集局長次長(旧・山田孝男氏)、萩原耕太郎・テレビ朝日報道局長次長(旧・芋原一善氏)を紹介した後、年初恒例の「経済見通し」研究会や今後のゲスト候補などについて議論した。

出席 宮田(謙)、中井(良)、倉重、脇、長谷部、矢島、長谷川、田崎、影山、井田、和田、萩原、広瀬、石郷岡、藤井の各委員。

第287回会報委員会

(11・13 大会議室)

12月号、1月号の編集について協議し、12月号で終了する「リレーエ

ッセー 佐藤番」の後に、「文化大革命の時代」(仮題)をスタートさせることを決めた。

出席 住田委員長、池谷、石田、上村、國府、竹居、見市、渡辺の各委員。

第363回会員資格委員会

(11・20 小会議室)

12月1日付の会員入退会を審議

し、理事会に答申した。
出席 石川、二藤部、今田、今井、若松の各委員。

第448回理事会(書面)

鈴木敦之会員(毎日出身)からの寄付200万円をクラブ賞基金に繰り入れることを決定した。

リレー エッセー

佐藤番④



私は1967年2月から1年間、佐藤番を務めた。朝早く、世田谷の首相私邸内の番小屋に入り、首相の起床から官邸入り、就寝までの一日の行動を逐一マークした。

こうした各社の首相密着取材はこの年7月で終え、共同、時事の通信2社取材体制に切り替えたので、私は一般紙では朝日の国正さん、読売の岡さんなどと並んで、最後の追っかけ記者となった。

その頃の私の番記者としての仕

最後の追っかけ記者

事は「取材」と誇れるほどのものでなく、内実は社のデスクへの「報告」に近かった。「誰それがいま総理と会いました」。そんなお決まりの伝達をデスクは「ふん、ふん」と聞き、その面会客の取材に別のベテラン記者を差し向ける。

そうした中で一人、「原稿」と一言、短い指令を発するデスクがいた。その数カ月後、佐藤首相に乞われ、秘書官として官邸入りした楠田実氏だった。ただ、そうして送られたただの面会原稿が紙面を華々しく飾ったという記憶は無い。

当時は首相が番記者の質問に答え

▼清原 武彦

あることは無く、記者側も質問を差し控えていた。ある時、首相が展覧会に立ち寄り、一つの絵を上げしげと眺めていたので、私は意を決して問いかけてみた。「ご感想は?」。

すると佐藤さんはあの大きな目をギロリと剥いて私を睨みつけた。ややあって一言。「君はこの絵を見てどう思うんだ」。

虚を突かれた私が絶句している時、佐藤さんは「まあ、そんなものだ」と言ってニヤリと笑った。

今と違って「という」と叱られそうだが、当時は傍らに近寄るだけで風圧を感じる政治家が多く、とりわけ佐藤さんは別格だった。

昨今、「記者クラブ制度の功罪」が論じられているが、当時の首相番は記者クラブ内のいま一つの記者クラブとも言えた。各社記者が自分の当番日は一日中、顔を突き合わせ、単独行動を取ろうにも取れず、皆で情報を共有し合っていた。

馴れ合いと言われるなら確かに馴れ合いかもしれない。だが、お互い日々、政治の生の動きを前に語り合い、時に議論を交わしつつ、政治記者としての資質を磨き合ってきた。今にして思えば、記者同士、貴重な空間を共有した一時期であった。

(きよはら・たけひこ)

産経新聞社代表取締役会長)

このシリーズは今回で終了します

佐世保港 異常放射能もれ事件 科技庁クラブ員の追及で発覚



中村 政雄

あれは1968年5月6日午後6時頃だった。科学技術庁記者クラブの黒板に「本日の放射能、風波が荒く測定しなかった」と書かれた。「ああそうか」と思っただけで誰もそれ以上気に留めなかった。

口止め をかぎつける

佐世保港には、米海軍の原子力潜水艦ソードフィッシュ(2360トン)が5月2日から停泊していた。乗組員の休養と物資の補給、小修理が目的で、停泊期間は1週間の予定だった。海上保安庁佐世保海上保安部が、ソ号周辺の放射能観測を実施していた。

その日は、ふだんの10〜20倍の放射線値を記録した。現場の担当者が、測定器の故障かとびくりしたほどの異常値で、通知を受けた科学技術

庁は堅く口止めた。

だが、佐世保の西日本新聞記者はいち早くこの異常値をかぎつけた。東京では7日付東京新聞朝刊に、「異常を検出か、異例の放射能再調査」という4段見出しで、このスクープが掲載された。

その朝の科学技術庁での定例の同庁長官との記者会見では、誰も質問しなかった。原潜が放射能汚染を起すなど思ってもみななかった。

レーダー説で逃げる科技庁

昼過ぎになって誰となく言い出した。「波が荒くて測れなかったというのに、2度測ったというのはどういうことだ」。

役人を呼んで聞いたが要領を得ない。データの提出を求めたら、返事がしどろもどろになり出した。

異常値の説明がなっていないかった。異常値が測定されたすぐ近くに

原潜がいるのだから、まずそれを疑うのが当然だと思うが、絶対に原潜ではないという。「雷雲が発生すると空中の放射能が一カ所に集中することがある。それが雨とともに落ちてきたのではあるまいか。外国でも実例がある」と、放射能課長は説明した。

雨のせいなら、陸上のモニタリングポストでも観測されているのに、ゼロだ。説明がつかない。かつて横須賀港で異常値の出たことがあった。その時はレーダーの影響だった。こんどもたぶんそうだろうという。だが、記録用紙を見ないと判断しかねる。

今ならファクスで観測データが送られてくるので、専門家による判断

がすぐできるが、当時はまだなかった。観測記録用紙は速達郵便で送られていた。

8日の各紙朝刊は、レーダーによる雑音らしいと報じた。これを受けて国会の委員会でも、科学技術庁はレーダー説で逃げた。

夜8時、測定記録用紙の速達便が届いた。科学技術庁は「放射能ではない」と発表した。私たちは「根拠があいまいだ」と追及、「専門家に検討させる」ことを約束させた。

翌9日、5人の専門家が科学技術庁に集まって検討した結果は、「放射能汚染と結びつけることは難しいが、現地調査することが望ましい」となって、調査団が派遣された。

調査団会見は討論会に

現地調査団は11日昼頃、佐世保で記者会見し、「記録どおりの放射能が本当に存在したとすれば、非常に作為的な特殊な状況と考えねばならず、その可能性はまことに小さいとの印象を強めた」と発表した。

調査団は東京に戻ると科学技術庁幹部に報告して協議後、同様の発表をした。科学技術庁でこの発表を聞いた記者の中に私もいたが、ふに落ちなかった。聞けば聞くほど原潜による放射能汚染に思えてきた。

夜中に始まった調査団の記者会見は、いつの間にか調査団と記者団との討論会に変わった。「異常測定値を放射能汚染と結びつけることはむずかしい」と主張していた調査団が討論を続けるうち、「原子力潜水艦から出た放射能と考えるを得ない」と言うように変わった。

会見が終わったのは午前4時だった。その間、デスクは「原稿送れ」としきりに催促してきたが、討論しているうちに原稿になることが出てくる。聞いたことがそのまま記事になるわけではない。デスクの電話には苦労した。

13日朝、木村俊夫官房長官は、この事件について「日米合同調査をするよう申し入れる」と発表した。合同調査となれば日米双方の見解が一致しないと結論が出ない。これは事実をごまかすための陰謀ではないか。調査は日本独自でやればよい。アメリカの専門家の来日など、外務省が仕組んだ芝居に違いないと考えて鍋島科学技術庁長官にこの点をたじた。同長官は「日米合同の調査ではない。日本独自でやる。アメリカ側専門家は、これに協力するかたちをとりたい」と、私たちの主張を受け入れてくれた。

長官は約束したが事務次官と官房

長がしぶった。「大臣の言葉を用いないで文書にしるとは失礼だ」という。そんないい方こそ失礼だと言いつつ、鍋島発言をメモにした一札を手に入れた。

苦心の質問づくり

15日、米国から3人の専門家が来日した。米原子力委員会海軍用原子炉部次長ウエグナー、同特別補佐官ギブンス、同安全技术主任マイルズの3氏。私たちは米国の専門家にあまり期待していなかった。軍事機密と称して、肝心のことは言わないに決まっている。原子力軍艦寄港に関する米国政府の口上書にも、「原子力軍艦の設計または運航に関する技術上の情報は提供しない」と明記してある。

どうせ日米の見解が食い違い、結論があいまいになるのがオチだと思つた。しかし来るからには仕方がない。米国専門家はいろいろな雑音を外務省や米国大使館から聞かされるに違いない。その前に、彼らの素直な意見を聞こうじゃないか、ということに記者クラブでの意見がまとまった。

記者クラブには、かつて米国の原潜に試乗した際に専門的なことを聞き過ぎて、ノーコメントの壁に会っ

て失敗した記者がいた。このため会見前夜3時間かかって質問書をこしらえた。前半は、日本の科学記者は無知だと思わせる質問を並べた。相手を安心させておき、すかさず痛いところを突く。そのとき相手が逃げられないような伏線を、前半の一見バカ風な質問の中に配置するという苦心の作品だった。

第2のハガチー事件?

私たちは羽田空港で米専門家と会見するため待ち構えたが、異様な空気を察してか、彼らは会見をしぶつた。自己紹介しただけで何も話さず部屋を出た。私と共同通信があとを追う、彼らが乗った車の前にたちはだかった。このことがあとになって「第2のハガチー事件」として米国内に伝わった。今から考えると若気のいたりだった。

翌16日の記者会見で、米専門家は「羽田では失礼した」とあやまった。しかし、純科学的な立場でアメリカ側専門家の意見を聞こうとした私たちの努力は、羽田で会見させなかった外務省の配慮で水泡に帰した。

25日夕、米専門家3人は「あらゆる資料を検討したが、ソードフィッシュ号は一滴の放射能も出さなかった」と言い残し、帰国した。この日

朝から開かれた日米の専門家による検討会に出席した3人は、日本側が要求した資料を全く提出せず、「科学的検討に値しない」といつて日本側専門家を憤慨させた。

そのあとの記者会見で何か聞き出せないかと努力したがダメだった。米専門家は役に立つ情報を何ひとつ出さなかった。それでも日本の専門家は原潜による放射能汚染だという容疑をいっそう深めた。だが決定的証拠は得られず、いまだに正体不明である。

日本新聞協会で、科学技術庁記者クラブの攻撃的取材が話題になったと聞いた。佐世保港の異常放射能事件は、記者クラブ員の追及によって産まれたものだったからである。発表を聞いて記事にするという在来の取材の殻を破ったやり方だった。そう書くと、いかにも立派な記者が揃っていたように聞こえるが、科学技術庁が最初に隠さなかったら、何事もなく過ぎたかもしれない。

なかむら・まさお会員 1933年
山口県生まれ 59年読売新聞入社
東京本社社会部 科学部 解説部次
長 論説委員 96年退社 電力中央
研究所研究顧問を経て名誉研究顧問
東京工大大学院非常勤講師など



宮澤喜一さんを語る会

ていただいたトークタイム＝写真。記者泣かせだった宮澤さんの受け答えについて「父なりのユーモアやサービスピ精神の表れだったのでは」と解説するなど、鋭い父親像を面白く聞かせてくださった。

11月26日夜、「宮澤喜一さんを語る会」がプレスセンターの10階ホールで開かれた。岩見隆夫、国正武重、田原総一朗さんが呼びかけたもので、宮澤さんを惜しむジャーナリスト、学者、元秘書官ら約150人が集まった。以下は幹事からのご報告。

会場では宮澤さんがよく出たTBS番組「時事放談」のダイジェスト版ビデオを大型スクリーンで放映。やせ細った晩年、「よその国がいやがることはしない方がいいなあ」と遺言のように語った姿が見る者の胸に迫る。バラエティー番組の女性タレントとの珍妙な掛け合いが映された時は大きな笑いに包まれた。盛り上がったのは長女のラフルアー宮澤啓子さんご夫妻に登壇し

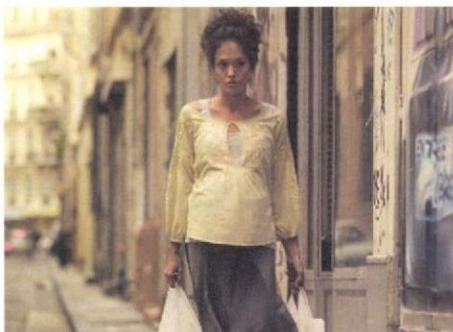
記者泣かせはユーモア精神？

聞き手を務めた「論座」編集長の薬師寺克行さん、総合司会を務めたテレビ東京報道局長の宮田鈴子さん、どうもお疲れさま。献杯の発声は河野洋平衆院議長にお願いし、最後は防衛大学校長の五百旗頭真さんに締めていただいた。風邪で欠席した中曽根康弘さんからは「口角泡を飛ばして議論しあつた日々」を懐かしむメッセージも寄せられた。

フロアでは久しぶりに顔を合わせた人々が宮澤さんを肴にして懐かしそうに歓談し、「この会は時々開いてほしい」との声も。宮澤事務所からは「家宝」ともいえる故人の古い著書3冊と、新聞雑誌に掲載の追悼記事を集めた冊子がお土産に配られ、参会者に喜んでいただけた。

朝日新聞論説主幹 若宮 啓文

●マイティ・ハート —愛と絆—



アンジェリーナ・ジョリーとブラッド・ピット。数多のスターが光り輝くハリウッドでも注目度抜群のカップルが主演とプロデュースでタッグを組んで世に問う感動のドキュメンタリー…。宣伝文句につられて事前知識もないまま試写会に足を運んだ。原題は「A Mighty Heart」。アンジーとブラピの華やかなイメージと日本でつけた副題の「愛と絆」のせいで、派手なアクションと甘美なラブストーリーを想像していたが、作品はジャーナリストのはしくれの心底を揺さぶる重いテーマを突きつけてきた。

ジャーナリストの勇気と苦悩

原作は2002年にパキスタンで取材中にテロリストに誘拐されて殺されたウォール・ストリート・ジャーナル紙のダニエル・パール記者(ユダヤ人)の妻(こちらはフランスのジャーナリスト)マリアンヌが、夫の遭遇した事件の真相を克明につづったノンフィクション。

カラチの町でダニエルが誘拐される場面からスタートするこの映画は、30日間にも及ぶ長く困難な捜査と悲惨な結末を、一つひとつの場面をすぐれた撮影技術と演技で丁寧につなげて、人種・宗教対立、テロ、国際紛争、そしてそれを取材するジャーナリストの勇気と苦悩を描いている。

夫を誘拐された臨月の妻を演じるアンジー。過去の作品で際立っていたゴージャスでセクシーなキャラクターをかなぐり捨て、深刻なテーマに体当たりで取り組んでいる。夫の死を知らされ、部屋にこもって慟哭する場面には心を打たれた。

映画&ゴシップ好きとして付け加えれば、この映画には、ブラピが最愛のパートナーのアンジーにアカデミー主演女優賞という最高の勳章を贈りたいという気持ちにがにじみでている。来春のオスカー受賞式の楽しみがまたひとつ増えた。

時事通信社取締役編集・国際・解説委員担当 泉 宏

<http://www.mh-movie.jp/top.html>

来年2月下旬

タイ、ラオス、カンボジアへ

7回目のアジア取材団を、明年2月下旬ないし3月初めに、1週間程度の予定で派遣する準備を進めている。福田内閣発足後、アジアへの関心が急速に表面化しているようだが、クラブは2000年から毎年、アジアへ取材団を派遣している。

各国要人との会見、現地進出の日本企業の実態などを通じて、アジア急成長の実態だけでなく、台頭著しい中国の影響力増大などにも着目してきた。これまでにインドネシア(2度)、シンガポール、タイ、マレーシア(2度)、台湾、フィリピン、インド、ベトナム(2度)、韓国な

どを訪問している。

今回2回目のバンコクでは、12月23日の下院選挙後に誕生する新政権の首脳会見、トヨタの工場取材などを考えている。プノンペンではフン・セン首相、ビエンチャンではブン・エンチャンでは3月

ビエンチャンでは3月下旬に第3回メコン川流域開発計画首脳会議(中国、ベトナム、ラオス、タイ、カンボジア、ミャンマー)が開かれる。ここで2010年までの計画が承認されるので、大メコン圏のこれまでと今後を知るのにも好タイミングの訪問になる。

「クラブ賞」候補者の推薦を締切は明年1月31日です

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締切は1月31日(木)です。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦する方は所定の用紙に候補者名などを記入し、推薦理由(2000字以内)と参考資料を添えて提出願います。推薦委員会、選考委員会では添付された資料をもとに審査します。詳細は事務局の長谷川へお問い合わせください。

アジア開発銀行の融資と円借款などを軸に、道路、電力などのインフラ整備を目的に始まったこの地域開発計画も、当初の年間5億ドル強からいまや50億ドル規模になっているようだ。

最近の傾向として、最終的に誰に会えるかは直前まで分からない可能性も残るが、これも地域での日本の存在感・位置の変化の反映だ。ぜひ、在京だけでなく、地方会員社からの派遣もお願いしたい。

鈴田会員からの寄付金

ここは日比谷公園の晩秋が一望できていい眺めですね。実は、ボクがプレスセンターに事務所を開いて25年が経ちました。去る10月24日、鈴田敦之会員が、事務局においてになり、こう切り出した。

ひとつ下の8階に事務所を持っておられる。数年前に体調を崩されたが、いまはすっかり回復し講演活動などでお忙しいようだ。

その鈴田さんが、これをと2000万の小切手をだされ、クラブ賞に役立ててください、と。鈴田事務所開設25周年パーティーでもやれよという友人もいるけど、そんなことよりも、後輩ジャーナリストのためになればと思ひましてね、と。同じビルの住

人といっても、格別の気遣いやお世話もしたことがなかったので、正直、意表を突かれた。人の世というのは分らないものだ。

会見などの活動だけでなく、政府から完全に独立したこのクラブの存在自体が、アジアでは大事な意味を持っているのだが、なかなか理解してもらえない。一部の現役は「老人クラブ」などと不心得にも酷評する。他方、報道界を取り巻く環境も決定的に厳しさを増し、各社も勢い連帯よりも組織防衛で手一杯という感じになりがちだ。そんなことが脳裏を離れずにいたので、本当に「ありがたい」ものだと感激した。

鈴田さんは84年8月から個人会員になっている。毎日新聞で日銀、経団連、大蔵、通産、経企など経済官庁や財界をカバーし、経済部副部長、電波本部長、編集委員などをつとめた。退社後、経済評論家として活躍している。ご本人は、こういうことは静かにやりたいのだが、とおっしゃるのを、無理をいって書かせてもらった。

ビルの前の国会通りに面した植え込みでサザンカが咲いている。新年互礼会は1月9日(水)午後1時からです。よいお年を。

(専務理事 岩崎玄道)

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われていま
す。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてク
ラブを利用しています。

■ 日韓国際環境賞授賞式

東アジアでの環境保全や公害防止への貢献に対して、
石綿対策全国連絡会議（日本）と韓国自然環境保全協会
が表彰された。アスベスト被害の実態を明らかにし、全
面禁止を世界に訴えてきたことと、韓国で絶滅の危機に
ある植物の保護活動を1963年から続けてきたことが、そ
れぞれ評価された。日韓国交正常化30周年の1995年に、
毎日新聞社と朝鮮日報社が共同で創設した賞で、今回が
13回目。（11. 1 10階ホール）

■ ねじれ国会に緊急提言 21世紀臨調

参院選後のねじれ国会に対する政党や政治家の迷走ぶ
りに対して「現下の政治情勢に対する緊急提言」を発表
した。代表の佐々木毅、西尾勝両氏と主査の飯尾潤の3
氏が説明、質疑応答を行った。提言では「日本の政治家
の統治能力が試されている。状況に対応した新しい政治
慣行の創造が求められている」とし、佐々木代表は「参
院で否決された法案を衆院が再議決することは普通のこ
と。権限を封印する必要はない」と。（11. 6 宴会場）
照会先：<http://www.secj.jp>

■ 「わがまち新聞」コンクール表彰式

第3回NIE週間の行事として、地域の問題をとりあげ
た手作り新聞を表彰した。最優秀賞は北海道白糠町立庶
路中学校の生徒6人の作品。「食」をテーマに地元の産
物やお店と、それを支える人々を紹介したもの。チームワ
ークとレイアウトが高く評価された。優秀賞には金沢市
立中央小学校、町田市立町田第二中学校、愛媛県立八幡
浜高校新聞部の作品が選ばれた。（11. 10 10階ホール）
照会先：日本教育文化財団 NIE部 電話：045-661-2031
<http://www.pressnet.or.jp/nie/nie.htm>

■ シンポジウム「民間6カ国協議」

「朝鮮半島の平和体制と北東アジアの地域協力」をテ
ーマに日、米、中、ロ、韓、北朝鮮から約20人の研究者
が集まり、意見を交換した。主催は東アジア総合研究所
（金森久雄会長、渡辺利夫理事長）。（11. 24 10階ホール）
照会先：東アジア総合研究所 電話：03-5269-8260

■ UNDP 「人間開発報告書07/08」記者発表

国連開発計画が世界同時発表に先駆けて記者会見を行
った。「気候変動との戦い」と題された今年の報告書は、
「気候変動は世界の最貧層と未来の世代が深刻な影響を
受ける」とし、国際社会に行動することを求めている。
村田駐日代表は発表した後、気候変動に対するUNDPの
取り組みについても紹介した。（11. 27 大会議室）
照会先：国連開発計画 電話：03-5467-4875

■ 「フェルメール展」記者会見

TBSと朝日新聞が主催して08年8月から12月に東京
都美術館で開催される展覧会。日本初公開の「小路」「ワ
イングラスを持つ娘」「マルタとマリアの家のキリスト」
のほか、同時代の17世紀のオランダ画家の作品も展示さ
れる。（11. 30 大会議室）
照会先：TBS文化事業部 電話：03-5571-3061

新しいOB会員

■ 囲碁の会（11. 17）

今回の例会も参加人数が12人。さみしい会が続き
ましたが、次回（12月22日）は年末恒例の大軒杯争
奪大会です。いつものように4組に分けて予選を行
い、最後はトーナメント形式で取り切りのカップを
目指してもらいます。

なお、11月の優秀賞は宮沢昭二郎（4勝1敗）、
佐伯晋（3勝）のお二人でした。

11月19日ゲスト 11月は大忙しだった。会見など
の行事が19回。多分、レコードだろう。3日の文化
の日にヒル米国務次官補の会見。決定が前日午後だ
ったため、ハガキでの案内はできなかった。eメール、
FAX登録の会員、出先クラブ、在京社の外信部な
どへの連絡で実施した。ヒル氏は前夜ソウルから飛
んできて会見の後帰国へ。いわば日本国民への説明
責任を果たすための来日みたいなものだった▼2回
目の自民・民主党首会談（2日）で大連立話が急浮
上、その後小沢さんの代表辞意（4日）・復帰（7
日午後）表明と続いたので、7日・太田公明代表、
8日・御手洗経団連会長、14日・伊吹自民幹事長、
19日・鳩山民主幹事長の会見がいずれも好タイミン
グになった。その意味ではついていた▼現職閣僚と
民主のネクスト大臣の政策討論会は10月の石破・浅
尾が皮切りだった。11月は財政再建をテーマに額賀・
中川対決を13日に予定していたが、衆院本会議の給
油新法の採決と重なり延期に。次の日取りはまだ読
めないが、12月は「環境」で鴨下・岡崎対決（19日）
が決まっている。（玄）

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉
カクテル

歳末は「新聞」でしめる
今月のハーフサイズ・カクテルは、その名もズバリ「ガゼット」(新聞 左)と「テキーラ・カクテル」。ブランドの豊かな香りとベルモットの爽やかな香りが楽しめるガゼットは、人の世の表裏哀歓を知る者にこそよく似合う。テキーラ・カクテルは、相性の良いテキーラとライムの結婚です。420円



和
食

ふぐ特別コース (2月1日まで)
冬のクラブレストランの定番、ふぐコースを今年も始めました。寒い季節にピッタリのひれ酒もご用意しています。
先付け、うす造り、鯛照り焼き、ふぐ唐揚げ、ふぐ鍋、雑炊 アイスクリーム (5,880円)

師走懐石 (12月27日まで)

暮れの慌ただしさを逃れて、静かな夜をお楽しみください。越乃寒梅やメ張鶴など美味しい日本酒もそろえてお待ちしております。(板長 薬科浩)
牡蠣味噌焼き、しめじ真丈、刺身3点、鮭・鯛みぞれ焼き、扇面蕪羅あん掛け、穴子湯葉糸巻揚げ、すっぽん雑炊、季節の果物 (5,250円)

洋
食

蟹コース (12月27日まで)
先月に引き続きタラバ、ズワイ、ワタリの3種類の蟹を使ったちょっと贅沢なディナーコースメニューです。(4,200円) (シェフ:黒須修一)

忘年会・新年会プラン

「忘年会・新年会」用のパーティープランをご利用ください。8種類の洋食に和食(寿司、そば)、デザートセットにしておひとり3,300円です。部屋代は別ですが、飲物の持ち込みは自由です。

年末年始の閉室のお知らせ

年末の営業は下記の通りです。
和食レストラン:12月28日(金)のお昼まで
洋食レストラン:12月27日(木)まで
ラウンジ、事務局:12月28日(金)午後5時まで
*28日は和食レストランで洋食もお出しします。
新年は1月7日(月)から通常通りオープンします。

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	ホームページアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=池谷 忍 石田昭彦 上村幸治 國府一郎
竹居照芳 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

新年互礼会は1月9日(水)午後1時から

恒例の新年互礼会員懇親会を1月9日(水)に開催します。OB会員も、現役の会員も出席しやすいように今年同様、開始時間を午後1時にしました。「2007年予想アンケート」の結果発表と最高得点者の表彰、08年の投票と、各社に景品の提供をお願いしている福引きも行います。多数の出席をお待ちします。

新しい会員名簿をご確認ください

11月1日付で作成した会員名簿をお送りしました。誤植、変更などお気づきの点がありましたら、事務局へお知らせください。

<寄贈書>

無名戦士たちの行政改革 竹居照芳会員
日本新聞年鑑 '07-08 日本新聞協会
H5N1型ウイルス襲来 国立感染症研究所 岡田晴恵

<訃報>

村野賢哉会員 (NHK出身 85歳) が11月23日前立腺がんのため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 807人
個人会員 1649人 法人・個人賛助会員 71社 178人
特別賛助会員 75人 名誉・功労会員 9人
計 217社 2,718人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」:11月の新規掲載

- 御手洗富士夫日本経団連会長「日本の直面する課題と今後の経済政策に期待すること」(2007.11.8)
- クリストファー・ヒル米国務次官補記者会見(英文)(2007.11.3)
- 酒井明司 三菱商事業務部ロシア担当次長「実務者が見たガスプロム」(2007.10.31)
- トーマス・シーファー駐日米大使昼食会(英文)(2007.10.24)
- 中村哲医師「ペシャワール会現地代表のアフガン報告」(2007.10.23)
- スティーブ・リーパー 広島平和文化センター理事長「いまなぜ原爆展か」(2007.9.20)
- ミルトン・フリードマン シカゴ大学名誉教授「問題でない“双子の赤字”」(1988.9.5)

今後の行事予定 (12/3現在)

- 12.19 (水) 15:00~16:45 (10階ホール)
政策討論会:環境問題 鴨下一郎環境相、岡崎トミ子民主党ネクスト環境相
- 12.21 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)
著者と語る『2011年7月24日 テレビが突然消える日』(朝日新書) 岡村黎明氏
- 12.26 (水) 15:00~16:30 (10階ホール)
著者と語る『日本の選択(適者)のモデルへ』(N T T出版) 小島明 日本経済研究センター会長
- 研究会「2008年経済見通し」
- ①1.25 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)
門間一夫 日本銀行調査統計局長
- ②1.28 (月) 13:00~14:30 (10階ホール)
高橋進 日本総合研究所副理事長
- ③ 15:00~16:30 (10階ホール)
水野和夫 三菱UFJ証券チーフエコノミスト
- ④1.30 (水) 13:00~14:30 (10階ホール)
ロバート・フェルドマン モルガン・スタンレー証券経済研究主席兼マネージングディレクター

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

写真回廊

撮影 小林 裕幸 (朝日新聞社
写真センター)



焼き畑などによって木々が焼け落ちた後も燃える泥炭地＝
インドネシア・中部カリマンタン州 (30秒間露光)

21世紀の南北問題

「国連気候変動枠組み条約締約国会議」
— 地球温暖化の対策を話し合う重要な会議
だが、何とかなりませんか、この長い会議
名は、落語の寿限無(じゅげむ)ではない
が、この会議の名称を2、3回唱える間に
も地球の温暖化はどんどん進むというの
に。行数に限りもあるので、ここでは勝手に
に「じゅげむ会議」と呼ぶことにする。

ところで、この不気味な火はいつたい何
なのだろう。インドネシア・カリマンタン
の燃える大地で、この12月に同国・バリ島
で開催の「じゅげむ会議」を照らし出すよ
うに温室効果ガスの源、二酸化炭素(CO₂)
の炎を上げている。

燃えているのは大地に堆積する泥炭。熱
帯の泥炭は本来湿地の水で守られ、CO₂
の吸収源だったが、焼畑農業の活発化で乾
燥し、泥炭に延焼する火災の頻発で一転CO₂
の排出源に。この国全体の泥炭地から
吐き出されるCO₂は日本の総排出量を上
回るというから、ただごとではない。

貧しい農家は焼畑によって収穫量が増え
る。だから、その焼畑を禁じるなど農家が
嫌がる政策を地元政府はとれない。30年先
の地球環境より明日の生活を、という「南」
の切実な声を「北」の国々も軽視は出来ぬは
ず。貧富の格差に地球環境問題が絡んで21
世紀の南北問題は一段と複雑になってきた。
南海の火は難解の炎を噴き続ける。

(伊藤三郎)